第４章
陸前高田市との交流

1. 子ども達の交流
2. なごや子ども市会
3. 友好都市協定の締結
4. 郷土芸能の相互披露
5. 市民美術展での相互展示
6. 市民交流事業補助制度
7. 博物館の交流
8. 議会の交流
9. 市民交流団の派遣
10. 「奇跡の一本松」後継樹と「絆の日」

第1節 子ども達の交流

1 陸前高田市の子ども達を名古屋市へ招待するプロジェクト

被災地の子ども達を勇気づけたい 名古屋市へ招待するプロジェクト発足

本市が始めた陸前高田市への“行政丸ごと支援”がきっかけとなり、陸前高田市役所において様々な情報収集を進めるなかで、陸前高田市の学校では、校舎が被災して他の校舎を間借りしたり、校庭に仮設校舎が建設されて思うように運動ができなかったりと、子ども達が不自由な環境で生活を送っていることがわかった。

また、修学旅行に行くことも困難になっているとの情報を入手し、子ども達を勇気づけたいという想いから、平成23(2011)年6月に「陸前高田市の子ども達を名古屋市へ招待するプロジェクト実行委員会」を発足させた。

市民や企業などの寄附や支援で実現 2年間で420名の中学生が来名

陸前高田市の子ども達を名古屋市へ招待するプロジェクトは、名古屋市民や企業、陸前高田市を応援する方々からの寄附や支援によって実現した。

当初は陸前高田市の中学校1校を夏休みに招待するところからスタートしたが、本プロジェクトの趣旨への賛同や支援が広がり、最終的には、2年間で5つの中学校から420名を本市に招待した。

名古屋を訪れた中学生は、市内の観光施設の見学やプロ野球観戦、ミュージカル鑑賞を楽しむとともに、名古屋の中学生との交流や様々な就労体験も行った。中学生は行く先々で心のこもったおもてなしを受け、名古屋での旅を満足してもらうことができた。

平成25年度以降は、中学生に芽吹き始めた心の絆を末永くつなげていけるよう、本市と陸前高田市の教育委員会が平成24年5月2日に締結した「絆協定」に基づき、中学生による双方向の中学生の交流を実施していくこととなった。

名古屋城交流会での記念写真

招待実績(平成23年度)

米崎中学校 102名(1年生28名、2年生27名、3年生28名、教員等19名)
気仙中学校 62名(1年生27名、2年生29名、教員6名)
小友中学校 54名(1年生11名、2年生14名、3年生12名、教員17名)
広田中学校 62名(1年生24名、2年生27名、教員11名)
合計4校 280名(生徒227名、教員等53名)

招待実績(平成24年度)

米崎中学校 26名(1年生20名、教員6名)
小友中学校 28名(1年生21名、教員7名)
高田第一中学校 86名(2年生74名、教員12名)
合計3校 140名(生徒115名、教員25名)

生徒の皆さんから名古屋市民へのメッセージ

米崎中学校の平成23年度卒業式次第には
名古屋城での写真が使われた

就労体験で看護師という職業を体験した陸前高田市の中学生

名古屋城での記念銘板除幕式（平成25年8月3日）

名古屋市民へのメッセージ

阿部重人 さん

元陸前高田市立米崎中学校
校長

どこでも温かく歓迎された中学生
名古屋の人たちとのふれ合いは財産に

震災以降、私が第一に考えたのが心のケアです。心が沈み暗くても、思い出づくりはできます。真っ白な素晴らしい思い出を与えたいと、名古屋からの中学生招待の話に手を挙げました。

名古屋の温かさには感謝しかないです。行く先々で市民の皆さんが手を振ってくれました。東海岩手県人会や市役所、大学生の寄附活動のおかげです。生徒はどこでも歓迎してもらいました。ガレキの世界から明るい別世界に来て、観光も職場体験も楽しんでいました。セントレアで、最後に生徒代表が「陸前高田はこれから何十年もかかって復興します。僕たちは名古屋の皆さんがいつか陸前高田に来られるようにがんばります。ありがとうございました」とあいさつをし、全員泣きました。

その後の作文から看護師志望の子が多いことを、名古屋市の担当者が知り、被災地の医療支援という形で名古屋市立大学での看護師養成につなげてくれました。不幸な震災でしたが、名古屋の人たちと人と人とのふれ合いが生まれました。それが今、私たちの財産です。

招待内容

平成23年度　米崎中学校（3年生）

実施期間　平成23年8月3日（水）～5日（金）

主な行程

- 1日目　名古屋港水族館、名古屋市公館での交流会
東海岩手県人会・大学生ボランティアとの交流会
- 2日目　東山動植物園、科学館、プロ野球観戦
- 3日目　市長との朝食会、名古屋城、栄周辺散策

初の名古屋訪問、空港で緊張の記念撮影

感動のハイタッチ

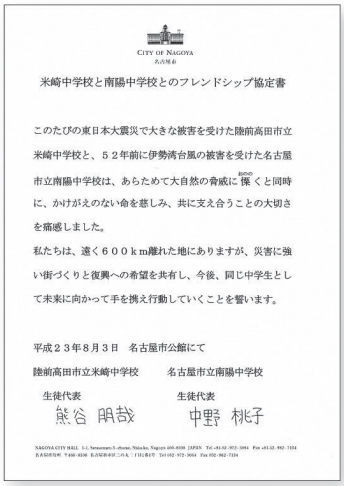
あこがれのプロ野球のマウンドで始球式

観戦中の生徒たちにナゴヤドームの観客から拍手が贈られた

名古屋おもてなし武将隊とともに名古屋城を散策

名古屋港水族館のアオウミガメの赤ちゃんに夢中

動物園でゾウのエサやり体験



CITY OF NAGOYA
名古屋市

米崎中学校と南陽中学校とのフレンドシップ協定書

このたびの東日本大震災で大きな被害を受けた陸前高田市立米崎中学校と、５２年前に伊勢湾台風の被害を受けた名古屋市立南陽中学校は、あらためて大自然の脅威に慄(おのの)くと同時に、かけがえのない命を慈しみ、共に支え合うことの大切さを痛感しました。

私たちは、遠く６００ｋｍ離れた地にありますが、災害に強い街づくりと復興への希望を共有し、今後、同じ中学生として未来に向かって手を携え行動していくことを誓います。

平成２３年８月３日　名古屋市公館にて

陸前高田市立米崎中学校　生徒代表　熊谷 明哉

名古屋市立南陽中学校　生徒代表　中野 桃子

伊勢湾台風で被害を受けた名古屋市立南陽中学校と米崎中学校との間に結ばれたフレンドシップ協定書

両市の中学生が一緒に合唱した交流会

出発ゲートで感謝を込めて

名古屋市民へのメッセージ

吉田凛之介 さん

元米崎中学校生徒
現在は実家の農業を継ぐ

ナゴヤドームでの始球式は一生の思い出
震災で学んだ、支え合うということ

震災後、学校が再開したとき、みんなの顔を見られてほんとにうれしかった。でも、中学校は避難所や仮設住宅だったので授業は小学校。部活の野球はできませんでした。空き地を見つけてキャッチボールして、そこも仮設住宅が建つと別の空き地を探しました。みんなで野球をやりたかったです。

修学旅行はないと思っていたので、名古屋への招待の話を聞いたとき、うれしいと同時に感謝の気持ちしかなかったです。今もそうです。ピッチャーの僕がナゴヤドームの始球式で投げました。130km投げるって言ったのに、緊張して116km。悔しかったけれど、一生の思い出です。帰ってきてからも、もう一度行きてぇとみんなで言ってました。ご飯も美味かった。科学館やプラネタリウムもぜんぶ楽しかった。

震災で学んだのは、自分の命は自分で守るということ。身に染みています。でも、人は一人では生きていけない。支え合うことが大事というのも学びました。今は祖父母を師匠に、父がやろうとしていた農業を継いでいます。

招待内容

平成23年度　米崎中学校（1、2年生）

実施期間　平成23年12月15日（木）～17日（土）

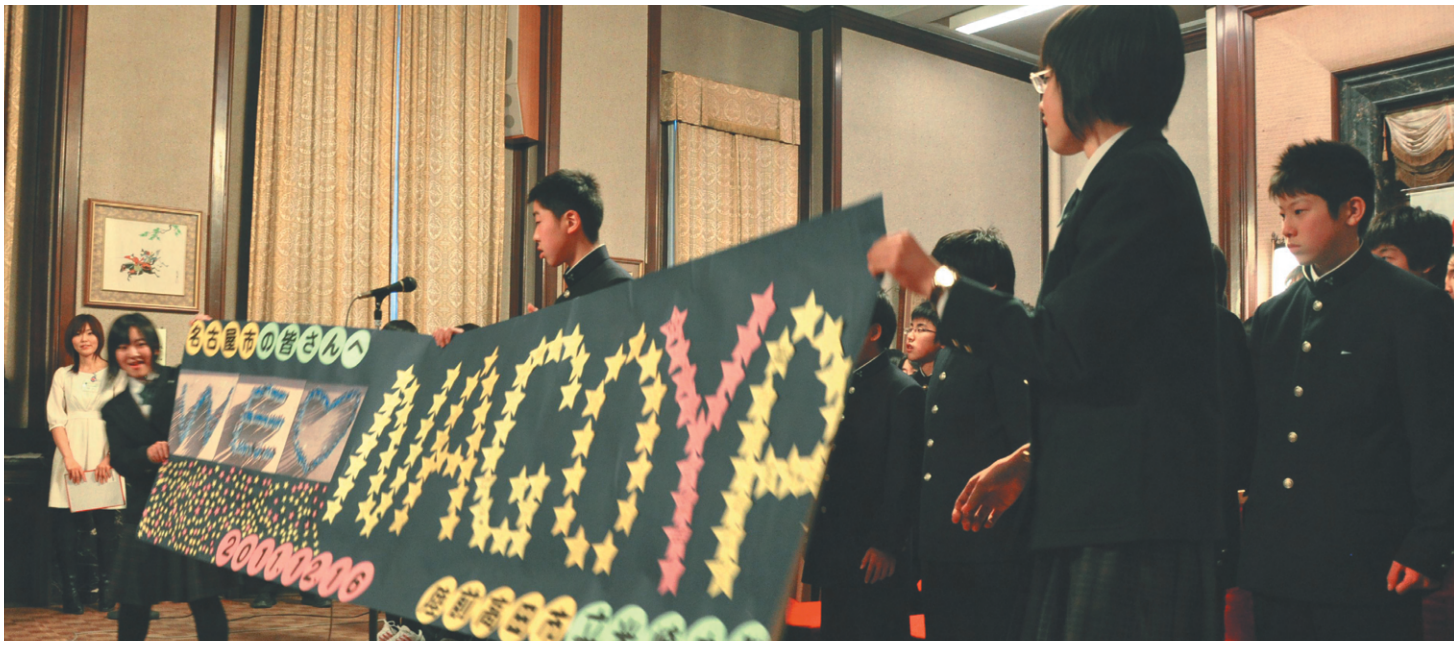
主な行程

1日目　ノリタケの森・産業技術記念館、科学館
東海岩手県人会・大学生ボランティアとの交流会
夜景見学

2日目　名古屋城（1年生）、名古屋港水族館（1年生）
就労体験（2年生）、名古屋市役所訪問、栄散策
ミュージカル観劇・ステージ登壇

3日目　名古屋城（2年生）

工場での就労体験でリベット打ち



感謝の気持ちを伝えに市役所を訪問

名古屋城ではおもてなし武将隊がお出迎え

専用の服に着替えて手術を見学

招待内容

平成23年度　気仙中学校（1、2年生）

実施期間　平成23年9月27日（火）～29日（木）

主な行程

1日目　科学館、ミュージカル観劇・ステージ登壇

2日目　就労体験、ノリタケの森・産業技術記念館
東海岸手県人会・大学生ボランティアとの交流会

3日目　市長との朝食会、名古屋城、栄散策、セントレア見学

宿泊先のホテルでも歓迎のお出迎え

名古屋名物ひつまぶしを堪能

名古屋城での記念撮影

病院での就労体験は大きな収穫に

観劇後の舞台に上がり、演者と交流

招待内容

平成23年度　小友中学校（1～3年生）

実施期間　平成23年10月14日（金）～16日（日）

主な行程

1日目　ミュージカル観劇・ステージ登壇
東海岩手県人会・大学生ボランティアとの交流会
夜景見学

2日目　就労体験、名古屋まつり・ステージで発表、栄散策
Jリーグ観戦

3日目　名古屋城、科学館、セントレア見学

名古屋まつりのステージで復興への決意を表明

伝統工芸「七宝焼き」の絵付けに挑戦

東海岩手県人会や大学生との交流会

名古屋城を名古屋の中学生が案内

Jリーグ観戦後、ピッチ上での記念撮影

招待内容

平成23年度　広田中学校（1、2年生）

実施期間　平成23年11月23日（水）～25日（金）

主な行程

1日目　ノリタケの森・産業技術記念館、栄散策
東海岸手県人会・大学生ボランティアとの交流会
夜景見学

2日目　就労体験、科学館
ミュージカル観劇・ステージ登壇

3日目　名古屋城

織機から自動車への産業の発展を学ぶ

東日本大震災の支援活動でも活躍したC130輸送機に体験搭乗

陶磁器の歴史を学ぶ

プロの調理師から指導を受けた

テーブルセッティングなどホテルの仕事を体験

名古屋土産を手に笑顔でお別れ

招待内容

平成24年度　米崎中学校（1年生）

実施期間　平成24年7月24日（火）～26日（木）

主な行程

- 1日目　名古屋城での南陽中学校との交流
  ノリタケの森・産業技術記念館の見学
  東海岩手県人会・大学生ボランティアとの交流会
  夜景見学
- 2日目　就労体験（4か所）、プロ野球観戦
- 3日目　科学館及び市長との交流

名古屋港水族館で飼育体験

名古屋の
ものづくり文化を
学ぶ

絵付け体験にも挑戦

名古屋城で名古屋の中学生と交流

プロ野球観戦での記念撮影

招待内容

平成24年度　小友中学校（1年生）

実施期間　平成24年9月26日（水）～28日（金）

主な行程

- 1日目　ノリタケの森・産業技術記念館の見学
  名古屋城での丸の内中学校との交流
  東海岩手県人会・大学生ボランティアとの交流会
  夜景見学
- 2日目　就労体験（9か所）、プロ野球観戦
- 3日目　科学館及び市長との交流

保育園での就労体験

調理師学校での実習

名古屋名物ひつまぶしに舌鼓

東海岩手県人会や大学生との交流会

名古屋市民へのメッセージ

招待内容

平成24年度　第一中学校（2年生）

実施期間　平成25年1月23日（水）～25日（金）

主な行程

- 1日目　就労体験事前学習
  （菊井中学校、浄心中学校、天神山中学校）
  科学館見学及び市長との交流
  東海岸手県人会・大学生ボランティアとの交流会
  夜景見学
- 2日目　就労体験（32か所）、劇団四季観劇
- 3日目　マナー学習

名古屋市立大学病院での就労体験

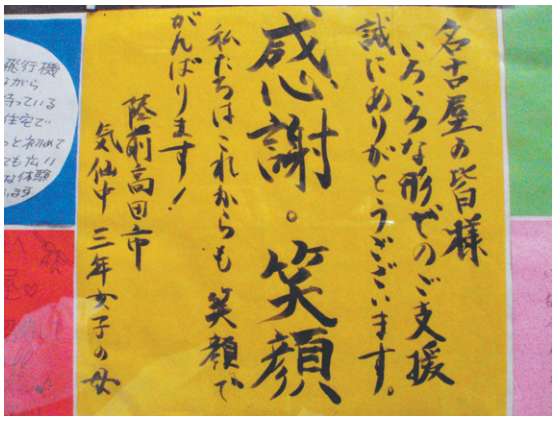
空港での記念撮影

菊井中学校との交流

名古屋市科学館での記念撮影

施設見学先へお礼のあいさつ

ホテルでの就労体験



陸前高田市の保護者からの感謝のメッセージ

名古屋市民へのメッセージ

佐々木保伸 さん

元陸前高田市立
第一中学校校長

助けてもらった“恩送り”を“音送り”に
この出会いで生徒が成長したことに感謝

被災直後に来た名古屋市消防局の方から聞きました。「自分は伊勢湾台風の時は3歳で、おばあさんに背負われて助かった。おばあさんからその恩返しをしろと言われて育った。どこかで大きな災害があればそこで恩返しをしなさい、それが“恩送り”だよと」そうか、名古屋が熱いのは伊勢湾台風が根っこにあるのかと思いました。

ガレキや避難所、仮設住宅の暮らしのなかにいた中学生を、修学旅行に招待していただきました。陸前高田ではできないような就労体験で元気をもらいました。名古屋市の中学生との交流で、一緒に合唱し気持ちが通いました。劇団四季で公演を観た後も、団員さんたちにお礼に合唱を贈りました。

一中は活動の柱の1つとして、合唱に力を入れてきました。自分たちは何もできないけども、一生懸命がんばってきた合唱で返そう。“恩送り”の“恩”を“音”に変え、自分たちの歌で“音返し”にしよう。名古屋の皆さんとの出会いと経験を通し、生徒たちがたくましく成長してくれたことに感謝しています。

2 陸前高田市教育委員会との「絆協定」

子ども達の育成につながる交流を共に進めるために「絆協定」を締結

平成23（2011）年度から「陸前高田市の子ども達を名古屋市へ招待するプロジェクト」が実施され、陸前高田市と名古屋市の交流が始まった中、両市教育委員会の間で、将来あるべき交流の形について話し合われた。この話合いで両市教育委員会は、将来、両市の交流の質や形が変わっても現在のつながりは必ず両市の交流の根底に残ること、そして、陸前高田市と名古屋市の人と人とのつながりを語り継ぐことが必要であるとの思いを共に持つに至った。

この思いを形にするため、陸前高田市教育委員会と名古屋市教育委員会は、両市の将来のまちづくりを担う子ども達の育成につながる交流を共に進めることを約束しあい、平成24年5月2日「絆協定」を締結した。

締結式は、陸前高田市役所において、陸前高田市教育委員会横田祐佶（ゆうきち）委員長と名古屋市教育委員会三林久美委員長が協定書に署名し、行われた。

絆協定について語った子ども達の言葉

5月、名古屋市と陸前高田市は、両市の発展を願い、「絆協定」を結びました。

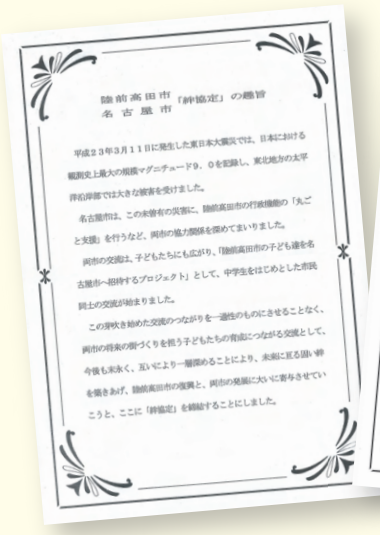
この協定にもとづいて、私たち中学生が、将来、陸前高田市と名古屋市の街づくりを担う者として、共に努力し、協力し合っていくことは、とてもすばらしいことです。

今日の交流会でのほんのわずかな一時は、とても楽しく、あっという間でした。

でも、このわずかな一時は、これからの陸前高田市と名古屋市の交流にとって、とても貴重なものです。

地理的には遠く離れた、陸前高田市と名古屋市ですが、これからも両市の交流を、心の通い合うものにし、友情を育み、息の長いものにしていきましょう。

～平成24年8月27日、両市中学生の交流会閉会式での両市生徒による言葉～


陸前高田市
名古屋市「絆協定」の趣旨

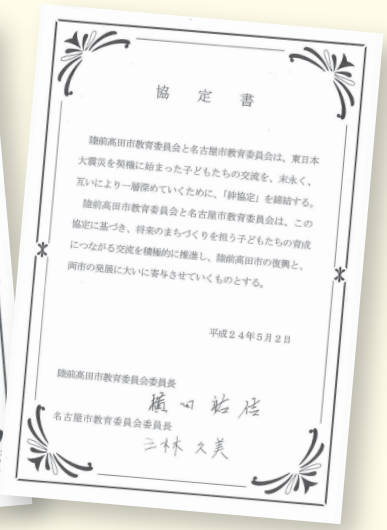
平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災では、日本における戦後史上最大の規模マグニチュード９．０を記録し、東北地方の太平洋沿岸部では大きな被害を受けました。

名古屋市は、この未曾有の災害に、陸前高田市の行政機能の「丸ごと支援」を行うなど、両市の協力関係を深めてまいりました。

両市の交流は、子どもたちにも広がり、「陸前高田市の子ども達を名古屋市へ招待するプロジェクト」として、中学生をはじめとした市民同士の交流が始まりました。

この芽吹き始めた交流のつながりを一過性のものにさせることなく、両市の将来の街づくりを担う子どもたちの育成につながる交流として、今後も末永く、互いにより一層深めることにより、未来に亘る強い絆を築きあげ、陸前高田市の復興と、両市の発展に大いに寄与させていこうと、ここに「絆協定」を締結することにしました。

「絆協定」の趣旨


協　定　書

陸前高田市教育委員会と名古屋市教育委員会は、東日本大震災を契機に始まった子どもたちの交流を、末永く、互いにより一層深めていくために、「絆協定」を締結する。

陸前高田市教育委員会と名古屋市教育委員会は、この協定に基づき、将来のまちづくりを担う子どもたちの育成につながる交流を積極的に推進し、陸前高田市の復興と、両市の発展に大いに寄与させていくものとする。

平成２４年５月２日

陸前高田市教育委員会委員長
横田祐佶
名古屋市教育委員会委員長
三林久美

協定書

協定書締結式（平成２４年５月２日）

絆交流のテーマソング『未来への翼』

平成 26（2014）年夏に、shiho さん、まっとさん、雪音さんの 3 名が陸前高田市で出会い、「アーティストである私達ができることをしたい」という想いから合唱曲『未来への翼』が制作された。

「東北とつながってほしい」「未来を生きる子ども達のために」という想いが込められた『未来への翼』は、将来のまちづくりを担う子ども達の育成を目指す絆協定と想いを一つにするものとして、交流のテーマソングとした。

交流活動などで、両市の生徒が一体となってこの曲を合唱している。

『未来への翼』を合唱する名古屋市の中学生

名古屋市民へのメッセージ

『未来への翼』を歌い、つながる子ども達 交流を続け、一生の友になってもらいたい

大学卒業後、東京で働いており、東日本大震災発生時は東京にいました。震災で被害を受けた故郷を見て、故郷に対する想いが強くなり、Uターンで陸前高田市へと戻りました。平成26年にアーティストのshihoと出会い、陸前高田市のシンガーソングライターのまっととともに、『未来への翼』を制作することとなりました。震災後、公園や校庭などの遊び場を奪われた子ども達は、非日常の景色が「あたりまえ」になりつつありました。でも苦難を乗り越えた先、絶対に強くなることができます。どんな状況でも、輝かしい未来があることを伝えていきたい、震災を忘れないでほしい、その想いで『未来への翼』を制作しました。

陸前高田市と名古屋市の子ども達の交流で『未来への翼』を歌ってもらえるなんて思ってもいなかったので、驚きでもあり、うれしい気持ちになりました。『未来への翼』でつながった子ども達が、大人になっても交流を続け、一生の友になってもらえたらと思います。

また、陸前高田市と名古屋市のみならず、あらゆる地域で『未来への翼』を歌っていただければと思います。

雪音 さん

シンガーソングライター

3 名古屋市の中学生による陸前高田市への訪問

名古屋市の中学生は夏に陸前高田市を訪問 防災学習、交流・ボランティア活動等を実施

毎年8月下旬に名古屋市中学生の交流団が陸前高田市を訪問し、防災学習を行うとともに、陸前高田市中学生との交流活動、ボランティア活動等を行っている。

交流団は交流団長の校長、引率団員の教員及び市立中学校2年生の代表生徒から構成されており、中学2年生は各中学校から1名ずつ選ばれ、毎年36～38名が参加しており、3年間で本市中学校全校が参加できるようになっている。

これまでの主な活動

■ 両市中学生の交流活動

お互いの市の紹介や、防災に関する意見交換等を行った。同年代の生徒たちが震災を経験してどんな思いなのかを聞けたのは、生徒にとって自分のことのように考えるうえで貴重なものであった。

また、合唱曲『未来への翼』の合唱やレクリエーション活動を通じて、両市の中学生の交流を深めた。

集合写真

■ 防災学習 ― 被災地見学

半壊の建物がそのまま残されていたり、ベランダの柵が無くなっていたり、冷蔵庫が投げ出されていたりなど、日常が一瞬で奪われてしまったことが一目で伝わるものであり、テレビ越しではなく、生徒たちは実際に見ることで津波や地震が及ぼす影響を肌で感じることができた。

津波の威力の大きさを感じる震災の遺構を見学し、実際にどこまで津波が来たのかという表示を目の当たりにして、震災や津波の恐ろしさを直に感じられた。

約7万本といわれる高田松原の中で、唯一耐え抜いた「奇跡の一本松」の周りの景色が津波の恐ろしさを物語っていた。

震災遺構の見学

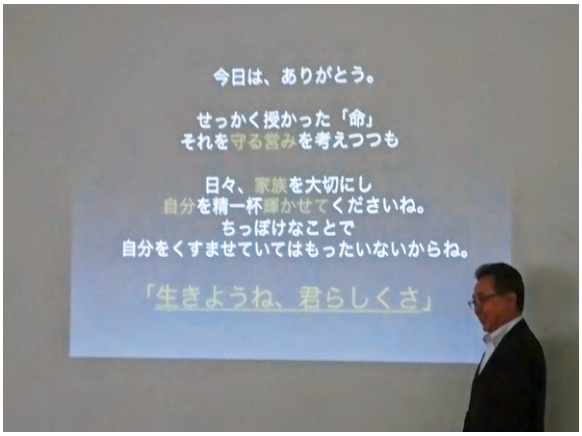
震災遺構
（「奇跡の一本松」の近くのユースホステル）

三陸鉄道の震災学習列車

■ 防災学習
― 陸前高田市長、教育長の講話

当時の実体験を踏まえた陸前高田市の市長や教育長の講話は、知識として震災を学ぶのではなく、命の大切さについて考えさせられるものであり、生徒たちの心に響くものだった。

また、復旧・復興への足取りや、災害にあった場合の対応方法等についてもお話を伺うことができ、被災状況を目の当たりにした生徒たちにとっては、自分事のように学びのあるものだった。



陸前高田市教育長による防災講話

3 名古屋市の中学生による陸前高田市への訪問

■ 陸前高田市民との交流

仮設住宅で窓ふきや草取りのボランティアをした。

また、仮設住宅にお住まいの方々との交流として、グループに分かれて話を聞いて日々の生活の大変さを学び、歌のプレゼントをした。

生徒たちは、震災から数年が経過していても仮設住宅で暮らす人が多いことに驚くとともに、苦しい生活を強いられ、悲しい体験をしてもなお、明るく生きている人たちと接することによって元気をもらった。

仮設住宅での窓ふき

仮設住宅での草取り

仮設住宅にお住いの方々との交流会

■ 産業体験

現地の一次産業を知るべく、カキ養殖の産業体験をした。現地の漁師の方と話す機会があり、そこで聞いた話は、漁業へ直接被害をもたらす津波の恐ろしさに関するものであった。

カキ養殖の産業体験

参加した生徒の声

■ 防災意識の向上

「自分が住む東海地方に襲いかかるであろう南海トラフ地震の恐ろしさに気づけた」、「地震や津波に対する危機感が強まった。地震や津波が起こった時、自分がどう動くか考えるようになった」といった感想が寄せられており、身近な災害に対する意識の向上につながっている。

現地で学んだことは忘れない

■ 復興への思い

「陸前高田市に実際に行った者として、学んだことや感じたことを可能な限り多くの人に伝えようと思った」、「交流が永く続き、絆を深めつつ、震災の記憶を風化させないようにできればと思った」といった感想も寄せられており、東日本大震災を風化させまいとする思いにもつながっている。

また、「訪問した際は被災から4、5年経っていたが、津波に流されてしまった所にはまだ土しかなかったことを鮮明に覚えており、4、5年経ってもこんな状況なのかと、一層津波や地震の怖さを感じた」、「東日本大震災から6年後の被災地の状況を見たが、作業用トラックが頻繁に走り、土砂が積っている荒れ地が多く、復興に終わりはないと感じた」など、実際に被災地を見学したことが深い学びにつながっている。

現地中学校での意見交換会

4 陸前高田市の中学生による名古屋市への訪問

陸前高田市の中学生は冬に名古屋市を訪問 名古屋市中学生との交流、職場体験等を行う

毎年1月上旬に陸前高田市中学生の交流団が名古屋市を訪問し、名古屋市立中学校の生徒との交流活動や職場体験等を行っている。

交流団は交流団長の校長、引率団員の教員及び市立中学校2年生の代表生徒から構成されており、中学校2年生は代表生徒20名が参加している。

これまでの主な活動

■ 両市中学生の交流活動 ― 学校訪問

毎年、陸前高田市交流団の本市訪問にあわせ、交流団が名古屋市内の中学校を訪問し、レクリエーションや共同制作、防災学習などを行った。

これまで、クイズ形式での学校紹介やゲーム、合唱曲『未来への翼』の合唱、トーチトワリングの実演、パネル製作や本市の伝統産業である名古屋提灯の作成等を行った。

防災学習では、陸前高田市教育委員会の教育長による被災や復興の状況などについて学ぶ防災講演会などを行った。

山王中学校での記念写真

瑞穂ヶ丘中学校を訪問

訪問先の中学校での交流

スクールランチを初めて喫食

名古屋提灯を共同作成

■ 両市中学生の交流活動 ― 名古屋市交流団との交流

夏に本市から陸前高田市を訪問した名古屋市交流団と再会し、親交を深めあうための交流会を実施した。毎年、久しぶりに出会う子ども達が、笑顔で語らい合い、交流の絆を改めて確かめる機会となっている。

両市の中学生が、「笑顔広がる学校づくり」などをテーマに設定して、それぞれの学校での取組みを紹介するなど、意見交換を行った。

また、陸前高田市と名古屋市の地形や市の特徴の違いもふまえて防災に関して様々な観点で話し合うことができ、たくさんの気付きがあった。

両市の中学生による意見交換会

4 陸前高田市の中学生による名古屋市への訪問

■ 職場体験

陸前高田市の中学生が、市内企業等のご協力のもと毎年10か所で職場体験を行った。これは、陸前高田市の将来のまちづくりを担う子ども達に、様々な職場で勤労体験をしてもらうために行っており、貴重な体験機会として、非常に好評を得ている。

これまでの職場体験の受け入れ先は右記のとおりである（五十音順）。

（株）アイガ、（株）イエス、（株）エイチーム、（株）シーアールイー、（株）ソロピッツァチェザリ、（株）中日新聞社、（株）デンソー、トヨタ自動車（株）、（株）ナゴヤキャッスル、名古屋港水族館、名古屋市交通局名港工場、名古屋市博物館、名古屋市立大学病院、日本ガイシ（株）、東山総合公園、（株）丸善ジュンク堂書店、（株）メニコン、ユニー（株）、陸上自衛隊守山駐屯地

名古屋市立大学病院での職場体験

東山動植物園での職場体験

日本ガイシ（株）での職場体験

名古屋港水族館での職場体験

（株）ソロピッツァチェザリでの職場体験

（株）ナゴヤキャッスルでの職場体験

■ 名古屋城見学

名古屋市役所等で、夏に陸前高田市を訪問した名古屋市立中学校の生徒が歓迎した後、両市の生徒合同で名古屋城を見学した。その際には、名古屋市立中学校の生徒が名古屋城案内を行った。

名古屋城の見学

4 陸前高田市の中学生による名古屋市への訪問

■ 名古屋市科学館見学

両市の中学生が、科学館スタッフによるサイエンスショーや特別展を見学した。世界最大として認定されたプラネタリウムの見学は、毎年好評を得ている。

名古屋市科学館での集合写真

表敬訪問

■ 表敬訪問

名古屋市役所で議場の見学をした後、名古屋市長、正副議長への表敬訪問を行った。

参加した生徒の声

■ 交流の意義

「災害の怖さや防災減災するための対策を実際に伝えたことで、震災の経験が無駄ではなく、中学生でも社会的に貢献できたと思えた」、「被災地の生の声を届けることがこんなにも必要とされる事だったのかと感じた。被災地のことを忘れずに、むしろ知ろうとしてくれる人や応援し続けてくれる人がこんなにもたくさんいるのかという思いが湧いた経験だった」といった感想が寄せられており、自らの経験が必要とされていることや、被災地とのつながりを感じてもらえている。

■ 自身の変化

「陸前高田市民は海に近いところに住んでいるので、防災のことだと津波に目を向けがちだが、名古屋市の生徒は土砂崩れや洪水などに目を向けていて、地域によって異なる防災への意識の向け方があることを知った。交流を機に津波以外の災害にも目を向けるようになった」といった感想が寄せられており、交流を経て災害に対する新たな視点を得るなどの変化があった。

5 名古屋市民・団体等による寄附・支援

将来のまちづくりを担う子ども達を育てよう 絆交流事業の充実のために寄附を募る

絆交流事業の充実のために寄附を募っている。市民・団体の皆さまからいただいた寄附金は、将来のまちづくりを担う子ども達の育成につながる交流を積極的に推進し、陸前高田市の復興と両市の発展に大いに寄与させる交流事業に充てられる。

寄附総額は、令和3年4月1日現在で9,432,087円、残高は3,000,775円となっている。

寄附していただいた方へは、活動のまとめをお送りするほか、金額に応じて感謝状を贈呈している。

絆交流募金のチラシ（名古屋市立工芸高等学校グラフィックアーツ科の生徒が作成）

絆交流募金
陸前高田市・名古屋市

松とシャチをかたどった絆交流募金のロゴマーク